

次に訪問パターンから宿泊パターンを見ていくと、訪問地それぞれで宿泊しているパターンが比較的多いが、福岡都心部—太宰府や福岡都心部—佐賀県の訪問パターンでは、福岡都心部のみの宿泊が多くなっている。

図表5-2 (20) 主な訪問パターンから見る宿泊パターン

順位	訪問パターン	回答数	構成比	宿泊パターン[回答数]
1	福岡都心部	86	31.5%	福岡都心部[86] (100%)
2	福岡都心部—大分県	51	18.5%	福岡都心部・大分県[46] (90.1%) 福岡都心部[4] (7.8%) 大分県[1] (1.9%)
3	福岡都心部—大分県—熊本県	24	8.7%	福岡都心部・大分県・熊本県[16] (66.6%) 福岡都心部・大分県[6] (25%) 福岡都心部[2] (8.3%)
4	福岡都心部—太宰府	15	5.5%	福岡都心部[14] (93.3%) 福岡都心部・太宰府[1] (6.6%)
4	福岡都心部—熊本県	15	5.5%	福岡都心部・熊本県[9] (60%) 福岡都心部[4] (26.6%) 熊本県[2] (13.3%)
6	福岡都心部—長崎県	10	3.6%	福岡都心部・長崎県[6] (60%) 福岡都心部[4] (40%)
7	福岡都心部—佐賀県	8	2.9%	福岡都心部[5] (62.5%) 福岡都心部・佐賀県[3] (37.5%)
8	福岡都心部—太宰府—大分県	7	2.5%	福岡都心部[5] (71.4%) 福岡都心部・大分県[2] (28.5%)

n=275 (宿泊地の記載があるもの)

(5) FF-Data

福岡県のみ宿泊するパターンが最も多く3割を超え、福岡県・大分県、福岡県・大分県・熊本県という宿泊県パターンが続いた。

宿泊パターンから訪問パターンを見ても、訪問パターンから宿泊パターンを見ても、訪問地のそれぞれで宿泊しているパターンが比較的多い。

図表5-2(21) 福岡空港出国者の主な宿泊パターンから見る訪問パターン

順位	宿泊パターン	サンプル数	構成比	訪問パターン [サンプル数]
1	福岡県	58	35.6%	福岡県[45] (75.6%) 福岡県—大分県[3] (5.2%)
2	福岡県・大分県	29	17.8%	福岡県—大分県[23] (79.3%) 福岡県—大分県—佐賀県[3] (10.3%)
3	福岡県・大分県・熊本県	15	9.2%	福岡県—大分県—熊本県[14] (93.3%)
4	福岡県・長崎県	8	4.9%	福岡県—長崎県[6] (75.0%)

図表5-2(22) 福岡空港出国者の主な訪問パターンから見る宿泊パターン

順位	訪問パターン	サンプル数	構成比	宿泊パターン[サンプル数]
1	福岡県	45	27.6%	福岡県[45] (100%)
2	福岡県—大分県	28	17.2%	福岡県・大分県[23] (82.1%) 福岡県[3] (10.7%)
3	福岡県—大分県—熊本県	19	11.7%	福岡県・大分県・熊本県[14] (73.7%)
4	福岡県—長崎県	8	4.9%	福岡県・長崎県[6] (75.0%) 福岡県[2] (25.0%)
5	福岡県—熊本県	7	4.3%	福岡県・熊本県[5] (71.4%)
6	福岡県—熊本県—佐賀県—長崎県	6	3.7%	福岡県・熊本県・佐賀県・長崎県[6] (100%)
6	福岡県—大分県—熊本県—佐賀県	6	3.7%	福岡県・大分県・熊本県・佐賀県[3] (50%)
6	福岡県—佐賀県—長崎県	6	3.7%	福岡県・佐賀県・長崎県[4] (66.6%)
6	福岡県—大分県—佐賀県	6	3.7%	福岡県・大分県[3] (50%) 福岡県・大分県・佐賀県[2] (33.3%)

n=163

(6) DiGJAPAN!

宿泊パターンは、福岡都心部のみが最も多く3割を超え、福岡都心部に宿泊し、福岡都心部のみ、または大分県や太宰府を日帰りで訪れるパターンとなっている。

2位に鹿児島県が入るが、訪問パターンは、鹿児島県のみあるいは熊本県-鹿児島県、宮崎県-鹿児島県と九州南部のみの動きとなっている。

福岡都心部・大分県の宿泊パターンでは、訪問パターンに北九州が含まれており、北九州へも日帰りで訪問していることがわかる。

訪問地が増えても、宿泊地は1~2のエリアに留まっており、日帰りで様々な地域を訪問していると考えられる。

図表5-2 (23) 主な宿泊パターンから見る訪問パターン

順位	宿泊地の組み合わせ	サンプル数	構成比	訪問地の組み合わせ[サンプル数]
1	福岡都心部	62	30.7%	福岡都心部[29] (46.8%) 福岡都心部-大分県[4] (6.5%) 福岡都心部-太宰府[4] (6.5%)
2	鹿児島県	29	14.4%	鹿児島県[13] (44.8%) 熊本県-鹿児島県[8] (27.6%) 宮崎県-鹿児島県[3] (10.3%)
3	福岡都心部・大分県	19	9.4%	福岡都心部-大分県[6] (31.6%) 福岡都心部-北九州-大分県[3] (15.8%) 福岡都心部-北九州-大分県-熊本県[2] (10.5%)
3	宮崎県	19	9.4%	宮崎県[16] (84.2%)
5	福岡都心部・長崎県	10	5.0%	福岡都心部-大分県-佐賀県-長崎県[2] (20.0%)
5	宮崎県・鹿児島県	10	5.0%	宮崎県-鹿児島県[9] (90.0%)
7	熊本県	8	4.0%	熊本-宮崎[2] (25.0%)
8	長崎県	7	3.5%	長崎県[3] (42.9%)
9	福岡都心部・熊本県	6	3.0%	福岡都心部-熊本県[2] (33.3%)
10	福岡都心部・大分県・熊本県	5	2.5%	福岡都市部-太宰府-北九州-大分県-熊本県[2] (40.0%)

n=202

訪問パターンから宿泊パターンを見ると、訪問地のうち2地域に宿泊するパターンか、1つの地域に宿泊し、その他の地域を日帰りで訪問していることがわかる。

図表5-2(24) 主な訪問パターンから見る宿泊パターン

順位	訪問地の組み合わせ	サンプル数	構成比	宿泊地の組み合わせ[サンプル数]
1	福岡都心部	29	14.4%	福岡都心部[29] (100%)
2	宮崎県	16	7.9%	宮崎県[16] (100%)
3	鹿児島県	13	6.4%	鹿児島県[13] (100%)
4	宮崎県—鹿児島県	13	6.4%	宮崎県・鹿児島県[9] (69.2%) 鹿児島県[3] (23.0%)
5	福岡都心部—大分県	11	5.4%	福岡都心部・大分県[6] (54.5%) 福岡都心部[4] (36.4%)
6	熊本県—鹿児島県	11	5.4%	鹿児島県[8] (72.7%) 熊本県・鹿児島県[2] (18.2%)
7	福岡都心部—北九州—大分県	7	3.5%	福岡都心部[3] (42.9%) 福岡都心部・大分県[3] (42.9%)
8	福岡都心部—熊本県	6	3.0%	福岡都心部[3] (50.0%) 福岡都心部・熊本県[2] (33.3%)
9	熊本県—宮崎県—鹿児島県	6	3.0%	熊本県・宮崎県[2] (33.3%) 鹿児島県[2] (33.3%)
10	福岡都心部—北九州—大分県—熊本県	4	2.0%	福岡都心部・大分県[2] (50.0%)

n=202

3. 利用交通機関分析

(1) FF-Data

福岡県を出発地とした利用交通機関を見ると、熊本県への移動はバスより鉄道が上回っているが、大分県・佐賀県への移動はバスと鉄道の利用は同じ程度の割合となっている。熊本県については、レンタカーの利用が他県に比べてやや高かった。

図表5-2(25) 福岡県を出発地とした県別利用交通機関(平成28年)

出発地	福岡県							
	山口県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県
バス	0.8%	51.8%	40.3%	35.8%	16.8%	45.6%	-	16.3%
鉄道	70.0%	28.3%	36.9%	46.3%	49.9%	35.5%	-	35.2%
レンタカー	29.2%	4.5%	11.6%	14.0%	27.7%	18.1%	-	28.2%

(2) アンケート調査(九州を訪れた香港人観光客)

※北九州市・下関市に立ち寄っていない観光客について調査

訪問パターンで上位を占める2点間訪問地での利用交通機関を見てみると、福岡都心部-大分県、福岡都心部-太宰府では、JR在来線・電車の利用率が比較的高く、福岡都心部-熊本県では、レンタカー利用が比較的高い。

図表5-2(26) 訪問地2点間の利用交通機関

2点間訪問地	回数数	交通機関
福岡都心部-大分県	51	バス[14](27.4%) JR在来線・電車[16](31.3%) レンタカー[11](21.6%)
福岡都心部-太宰府	15	バス[5](33.3%) JR在来線・電車[7](46.7%) レンタカー[1](33.3%)
福岡都心部-熊本県	15	バス[4](26.6%) JR在来線・電車[2](13.3%) レンタカー[5](33.3%)

4. 九州における主要ルート

前項までの各種データ分析から、以下の主要ルートを想定した。

福岡都心部のみ、または福岡都心部—大分県、更に熊本も加わった3ルートを軸としたパターンは割合が多く、これを第1グループとした。福岡都心部をベースに比較的短時間の移動距離での日帰り観光、あるいは反対に長崎県、熊本県へ宿泊を伴う周遊パターン等を第2グループとした。

(1) 第1グループ

・福岡都心部

モバイル空間統計で、1地点に留まる行動を測定できないものの、FF-Data 訪問パターン、DiGJAPAN!においては1位であったことや、各データの宿泊パターンからみる訪問パターンにおいても、福岡都心部は全て最上位に位置する。宿泊については、Agoda 宿泊データからも福岡都心部での宿泊を確認できる。

・福岡都心部—大分県

モバイル空間統計の流動量では1位、FF-Data 訪問パターン及びアンケート調査で2位、DiGJAPAN!で5位であった。宿泊については、アンケート調査、FF-Data、DiGJAPAN!のいずれにおいても、訪問地それぞれで宿泊するパターンが多かった。

・福岡都心部—大分県—熊本県

モバイル空間統計の流動量では1位と5位、FF-Data 訪問パターンでは3位であった。上記の「福岡都心部—大分県」に熊本県が加わったパターンとなっている。宿泊については、アンケート調査、FF-Dataにおいて訪問地それぞれで宿泊するパターンが多かった。

(2) 第2グループ

・福岡都心部—太宰府

モバイル空間統計の流動量で2位、アンケート調査で4位であった。宿泊については、アンケート調査で、大半が福岡都心部のみとなっている。

・福岡都心部—北九州

モバイル空間統計の流動量で3位であり、DiGJAPAN!では主な宿泊パターンに福岡都心部・北九州の組み合わせがないことから、福岡都心部に宿泊し、北九州を日帰りで訪問しているパターンが多いと推測される。

・福岡都心部—長崎県

モバイル空間統計の流動量では4位、FF-Data 訪問パターンで4位であった。アンケート調査では6位で、そのうち6割は福岡都心部と長崎県それぞれに宿泊するパターンであった。

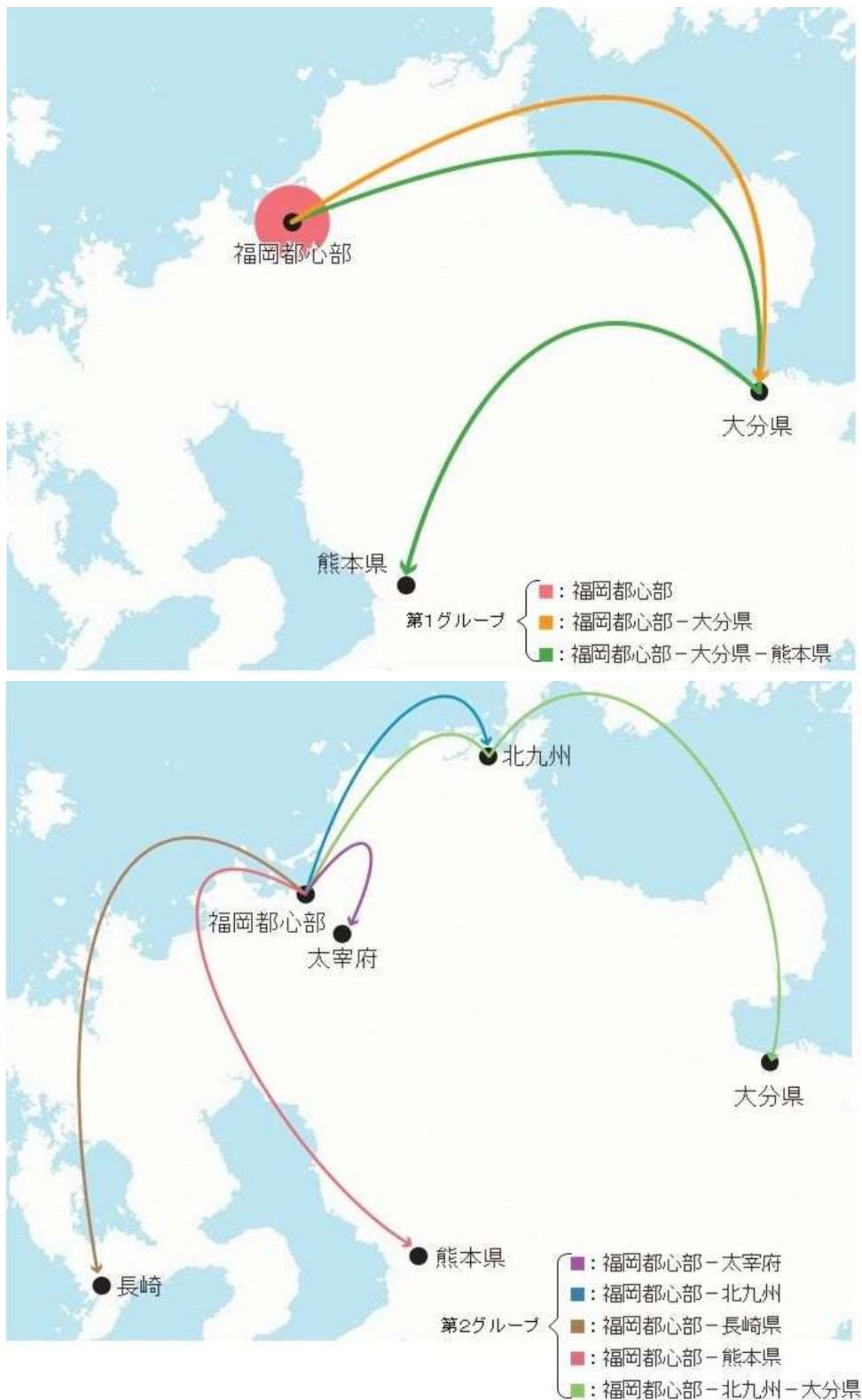
・福岡都心部—熊本県

モバイル空間統計の流動量、FF-Data 訪問パターンでは5位、アンケート調査では4位、DiGJAPAN!では8位であった。宿泊については、DiGJAPAN!では、福岡都心部のみに宿泊するパターンは半数あるものの、FF-Data やアンケート調査では、福岡都心部と熊本県それぞれに宿泊するパターンが6~7割程度と多い。

・福岡都心部—北九州—大分県

モバイル空間統計の流動量では1位(福岡—大分県)・3位(福岡—北九州)、FF-Data 訪問パターンでは2位、DiGJAPAN!では7位であった。宿泊については、DiGJAPAN!で、福岡都心部のみまたは、福岡都心部と大分県に宿泊するパターンが挙がっており、北九州へは日帰りで立ち寄っていると推測される。

九州における香港人観光客の動きとして、福岡都心部と大分県を軸としたパターンが想定された。主に福岡ともう一つの観光地（県）というパターンが多く、3つ、4つの県を巡るルートは比較的少ないことも見えてきた。宿泊については福岡都心部の連泊が多く、そこに大分県や熊本県への宿泊を伴うパターンが加わっている。



図表5-2 (27) 九州における主要ルート図

図表5-2(28) 九州における主要ルート

グループ	九州における主要ルート	ルートの特徴
1	福岡都心部	福岡都心部に宿泊し、福岡都心部のみを周遊するパターン
	福岡都心部—大分県	訪問地それぞれで宿泊するパターンが多い
	福岡都心部—大分県—熊本県	訪問地それぞれで宿泊するパターンが多い
2	福岡都心部—太宰府	福岡都心部に宿泊し、太宰府を日帰りで訪問するパターンが多い
	福岡都心部—北九州	福岡都心部に宿泊し、北九州を日帰りで訪問するパターンが多い
	福岡都心部—長崎県	訪問地それぞれで宿泊するパターンが多い
	福岡都心部—熊本県	訪問地それぞれで宿泊するパターンが多い
	福岡都心部—北九州—大分県	福岡都心部と大分県に宿泊し、北九州を日帰りで訪問するパターンが多い

第2節 北九州市・下関市を訪れた観光客の主要ルート

1. 各種データによるルート分析

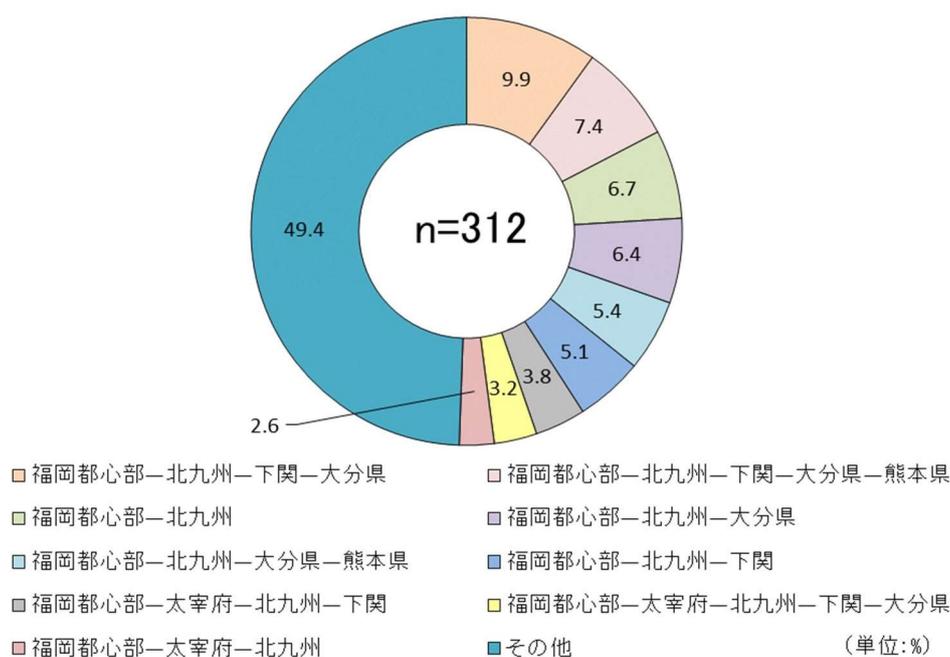
(1) アンケート調査（北九州市・下関市を訪れた個人観光客）

福岡都心部、北九州・下関、大分県、熊本県を組み合わせた訪問パターンが上位に6パターン続く。上位の6パターンまでを合計しても4割程度であり、多様な訪問パターンとなっている。

図表5-2 (29) 訪問パターン

順位	訪問パターン	回答数	構成比
1	福岡都心部—北九州—下関—大分県	31	9.9%
2	福岡都心部—北九州—下関—大分県—熊本県	23	7.4%
3	福岡都心部—北九州	21	6.7%
4	福岡都心部—北九州—大分県	20	6.4%
5	福岡都心部—北九州—大分県—熊本県	17	5.4%
6	福岡都心部—北九州—下関	16	5.1%
7	福岡都心部—太宰府—北九州—下関	12	3.8%
8	福岡都心部—太宰府—北九州—下関—大分県	10	3.2%
9	福岡都心部—太宰府—北九州	8	2.6%

n=312 単位：人



図表5-3 (30) 訪問パターンの割合

(2) DiGJAPAN!

福岡都心部—北九州—大分県が最も多く、次いで福岡都心部—北九州—大分県—熊本県、福岡都心部—太宰府—北九州という順であった。このデータでも福岡都心部を拠点に九州北部を訪問する多様な動きが見える。

図表5-2(31) 訪問パターン

順位	訪問地の組み合わせ	サンプル数	構成比
1	福岡都心部—北九州—大分県	6	15.8%
2	福岡都心部—北九州—大分県—熊本県	4	10.5%
3	福岡都心部—太宰府—北九州	3	7.9%
3	福岡都心部—北九州—大分県—長崎県	3	7.9%
5	福岡都心部—太宰府—北九州—大分県—熊本県	2	5.3%
5	福岡都心部—太宰府—北九州—下関	2	5.3%
5	福岡都心部—太宰府—北九州—大分県—熊本県—佐賀県	2	5.3%

n=38

2. 各種データによる宿泊分析

(1) Agoda 宿泊数データ

九州・下関における総泊数では、北九州は7位、下関は10位に位置している。

北九州においては、4泊の割合が比較的高く、宮崎県や鹿児島県など定期便の就航のある地域と同程度となっている。

図表5-2 (32) 宿泊数(再掲)

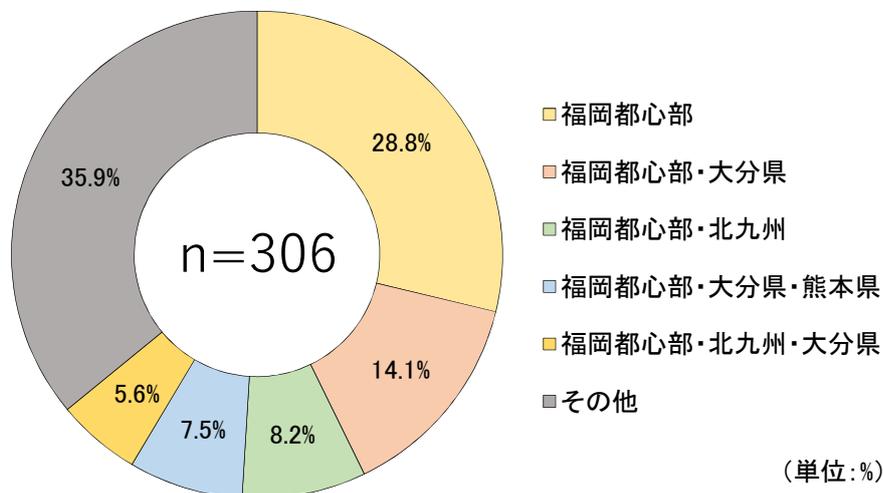
順位	観光地名	総宿泊数	構成比	平均	1泊	2泊	3泊	4泊	5泊	6泊	7泊	8泊以上
1	福岡都心部	10,167	53.6%	2.10	42.9%	28.3%	14.2%	8.9%	3.3%	1.7%	0.5%	0.3%
2	鹿児島県	3,166	16.7%	1.92	47.8%	31.0%	14.1%	6.5%	2.9%	0.5%	0.7%	0.2%
3	大分県	2,109	11.1%	1.16	85.1%	34.3%	2.9%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%
4	熊本県	1,381	7.3%	1.36	70.8%	36.7%	5.0%	1.6%	0.3%	0.0%	0.1%	0.0%
5	長崎県	837	4.4%	1.35	70.8%	49.5%	7.4%	0.6%	0.0%	0.3%	0.3%	0.0%
6	宮崎県	662	3.5%	1.51	60.8%	72.6%	14.0%	5.4%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%
7	北九州	378	2.0%	1.33	75.7%	52.5%	8.9%	5.9%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%
8	佐賀県	227	1.2%	1.31	76.9%	36.9%	7.1%	2.4%	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%
9	下関	30	0.2%	1.20	80.0%	62.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
10	太宰府	3	0.0%	1.00	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
11	柳川	3	0.0%	1.50	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

n=18,963 単位：泊

※北九州市・下関市を訪れた個人観光客に限った数値ではない。

(2) アンケート調査（北九州市・下関市を訪れた個人観光客）

宿泊パターンでは福岡都心部のみのパターンが最も多く約3割、福岡都心部・大分県、福岡都心部・北九州が続き、上位3つのパターンで半数以上を占める。福岡都心部に大分県や北九州、熊本県を組み合わせるパターンで7割近くとなっている。



※北九州市・下関市での宿泊があるもの

図表 5-2 (33) 宿泊パターンの割合

北九州市・下関市の宿泊数を見ると、「0泊」(69.2%)が多く、「1泊」以上は3割程度で、平均0.5泊であった。

図表 5-2 (34) 主な宿泊パターンからみる訪問パターンの組み合わせ

順位	宿泊パターン	回答数	構成比	訪問パターン [回答数]
1	福岡都心部	88	28.8%	福岡都心部—北九州[11] (12.5%) 福岡都心部—下関[10] (11.4%) 福岡都心部—北九州—下関—大分県[6] (6.8%) 福岡都心部—太宰府—北九州—下関[6] (6.8%)
2	福岡都心部・大分県	43	14.1%	福岡都心部—北九州—下関—大分県[16] (37.2%) 福岡都心部—北九州—大分県[5] (13.9%) 福岡都心部—北九州—大分県—熊本県[6] (11.6%)
3	福岡都心部・北九州	25	8.2%	福岡都心部—北九州[6] (24.0%) 福岡都心部—太宰府—北九州[5] (20.0%) 福岡都心部—北九州—下関[4] (16.0%)
4	福岡都心部・大分県 ・熊本県	23	7.5%	福岡都心部—北九州—下関—大分県—熊本県[12] (52.1%) 福岡都心部—大分県—熊本県[5] (21.7%)
5	福岡都心部・北九州 ・大分県	17	5.6%	福岡都心部—北九州—大分県[9] (52.9%) 福岡都心部—北九州—下関—大分県[5] (29.4%)

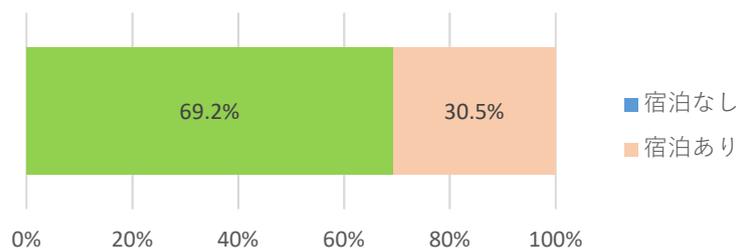
n=306 (宿泊地の記載があるもの)

図表5-2 (35) 主な訪問パターンから見る宿泊パターン

順位	訪問パターン	回答数	構成比	宿泊パターン[回答数]
1	福岡都心部—北九州 —下関—大分県	31	10.1%	福岡都心部・大分県[16] (51.6%) 福岡都心部[6] (19.3%) 福岡都心部・北九州・大分県[5] (16.1%)
2	福岡都心部—北九州 —下関—大分県—熊本県	23	7.5%	福岡都心部・大分県・熊本県[13] (56.5%) 福岡都心部・大分県[3] (13.0%) 福岡都心部[2] (8.7%)
3	福岡都心部—北九州	21	6.9%	福岡都心部[11] (52.4%) 福岡都心部・北九州[6] (28.6%) 北九州[2] (2.5%)
4	福岡都心部—北九州 —大分県	20	6.5%	福岡都心部・北九州・大分県[9] (45.0%) 福岡都心部・大分県[6] (30.0%) 福岡都心部[3] (15.0%)
5	福岡都心部—北九州 —大分県—熊本県	17	5.6%	福岡都心部・大分県・熊本県[5] (29.4%) 福岡都心部・北九州・大分県・熊本県[5] (29.4%) 福岡都心部・大分県[5] (29.4%)
6	福岡都心部—北九州 —下関	16	5.2%	福岡都心部[10] (62.5%) 福岡都心部・北九州[4] (25.0%)
7	福岡都心部—太宰府 —北九州—下関	12	3.9%	福岡都心部[7] (58.3%) 福岡都心部・北九州[2] (16.6%)
7	福岡都心部—太宰府 —北九州—下関—大分県	10	3.3%	福岡都心部[4] (40.0%) 福岡都心部・大分県[4] (40.0%)
9	福岡都心部—太宰府 —北九州	8	2.6%	福岡都心部・北九州[5] (62.5%) 福岡都心部[2] (25.0%)

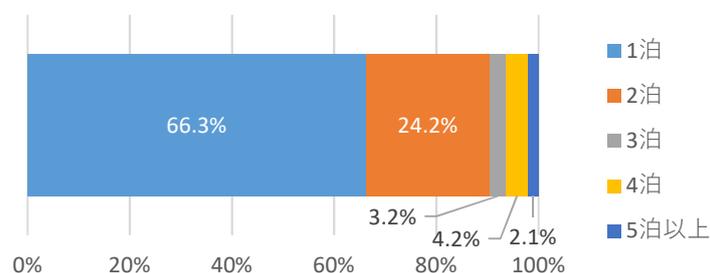
n=306 (宿泊地の記載があるもの)

北九州市・下関市の来訪者のうち、宿泊は約3割となっている。



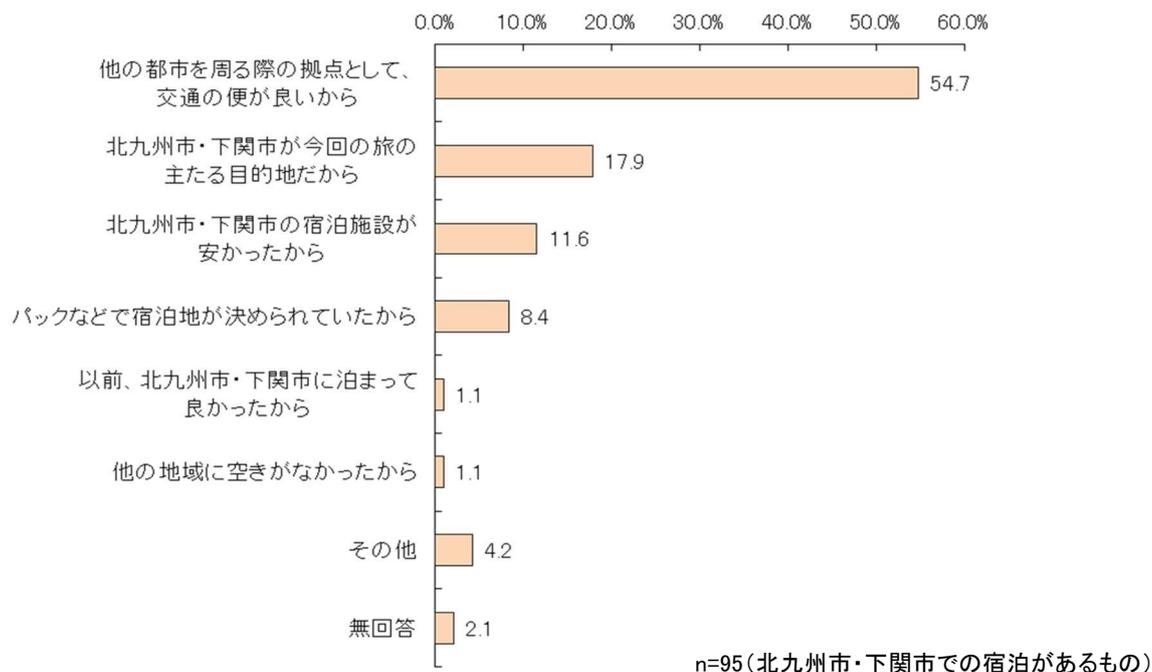
図表5-2(36) 北九州市・下関市来訪者の宿泊の有無

また、北九州市・下関市での平均宿泊数は1.5日である。



図表5-2(37) 北九州市・下関市での宿泊者の宿泊日数の割合

北九州市・下関市に宿泊した理由を見ると、「他の都市を回る際の拠点として、交通の便が良いから」が最も多いことから、県内で周遊する際や、大分県への訪問の際に、交通の便が良いと考えられていることがうかがえる。



図表5-2(38) 北九州市・下関市で宿泊した理由 ※複数回答

3. 利用交通機関分析

北九州及び下関への流入出に利用される交通機関をみると、福岡都心部との移動はバスが少なく、鉄道とレンタカーが多く使われている。

図表5-2 (39) 北九州・下関への流入出の利用交通機関

順位	流入出ルート	サンプル数	交通機関 [サンプル数]
1	福岡都心部⇔北九州	240	レンタカー[80] (33.3%) JR 新幹線[76] (31.7%) JR 在来線・電車[69] (28.8%)
2	福岡都心部⇔下関	108	レンタカー[46] (42.6%) JR 在来線・電車[32] (29.6%) JR 新幹線[18] (16.7%)
3	北九州⇔別府	42	JR 新幹線[16] (38.1%) レンタカー[15] (35.7%) JR 在来線・電車[8] (19.0%)

4. 北九州市・下関市を訪れた観光客の主要ルート

前項までの各種データの分析から、以下の主要ルートを想定した。

なお、福岡都心部を拠点に大分県や熊本県を訪問し、その際に北九州市・下関に立ち寄るパターンと福岡都心部をベースに北九州市・下関市を日帰り訪問するパターンの割合が多く、これを第1グループとした。その次に多い福岡都心部－太宰府－北九州をベースに下関や大分県を訪問するというパターンを第2グループとしてまとめた。

(1) 第1グループ

・福岡都心部－北九州－下関－大分県

北九州と下関の両都市とも訪れ、福岡と大分県も訪れるパターンが最も多く、モバイル空間統計やアンケートで最も高い割合を示した。宿泊に関しては、アンケートでは約半数が福岡都心部と大分県に宿泊し、この2地域に加え北九州にも宿泊するパターンと福岡都心部のみに宿泊するパターンがともに約2割確認された。

・福岡都心部－北九州－下関－大分県－熊本県

1位のルートに熊本県が加わり、九州3県を周遊するルートである。モバイル空間統計の流動量では1位、3位、5位、6位、7位、アンケートでは2位であった。宿泊については、アンケートでは福岡都心部と大分県、熊本県の3地域に宿泊するパターンが半数以上となっており、福岡都心部のみに宿泊するパターンはほとんど見られなかった。

・福岡都心部－北九州－大分県

関門地域には北九州だけに立ち寄ったパターンである。モバイル空間統計の流動量では1位と3位、DiGJAPAN!では1位、アンケートでは4位であった。宿泊に関しては、アンケートでは、半数近くが福岡都心部と北九州、大分県それぞれに宿泊している。

・福岡都心部－北九州－大分県－熊本県

モバイル空間統計の流動量では1位、3位、5位、DiGJAPAN!では2位、アンケートでは5位であった。宿泊に関しては、アンケートで、約6割が福岡都心部、大分県、熊本県に宿泊し、この3地域に加え北九州にも宿泊するパターンが約3割あった。

・福岡都心部－北九州

モバイル空間統計の流動量では3位、アンケートでは3位であった。宿泊に関しては、アンケートで半数以上が福岡都心部のみに宿泊している。

・福岡都心部－北九州－下関

モバイル空間統計の流動量では3位、6位、7位、アンケートでは6位であった。宿泊に関しては、アンケートで約6割が福岡都心部のみに宿泊している。

(2) 第2グループ

第2グループは以下のルートが挙げられる。

・福岡都心部－太宰府－北九州

モバイル空間統計の流動量では2位、3位、DiGJAPAN!では3位、アンケートでは9位であった。宿泊に関しては、アンケートで福岡都心部と北九州に宿泊するパターンが6割を超えている。

・福岡都心部－太宰府－北九州－下関

モバイル空間統計の流動量では2位、3位、6位、7位、DiGJAPAN!では5位、アンケートでは7位であった。宿泊に関しては、アンケートで福岡都心部のみの宿泊が半数を超えている。

・福岡都心部－太宰府－北九州－下関－大分県

モバイル空間統計の流動量では1位、2位、3位、6位、7位、アンケートでは8位であった。宿泊に関しては、アンケートでは、福岡都心部のみ、または福岡都心部と大分県に宿泊するパターンとなっている。



図表5-2(40) 北九州市・下関市主要ルート図

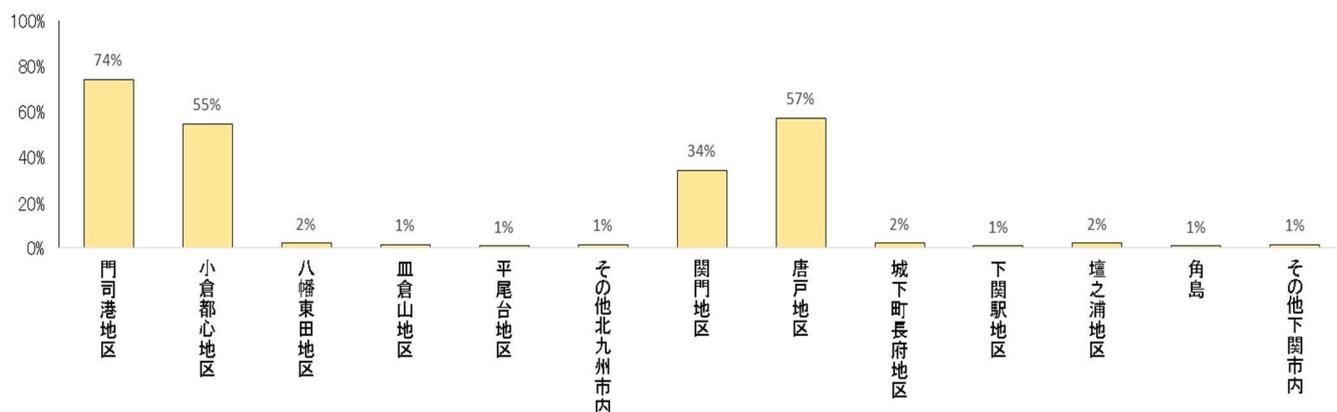
図表5-2(41) 北九州市・下関市を訪れた観光客の主要ルート

グループ	北九州・下関を訪れた観光客の主要ルート	ルートの特徴
1	福岡都心部－北九州－下関－大分県	福岡都心部と大分県に宿泊するパターンが多い
	福岡都心部－北九州－下関－大分県－熊本県	福岡都心部と大分県、熊本県の3地域に宿泊するパターンが多い
	福岡都心部－北九州－大分県	福岡都心部と大分県に宿泊するパターンが多い
	福岡都心部－北九州－大分県－熊本県	福岡都心部、大分県、熊本県のそれぞれで宿泊するパターンが多い
	福岡都心部－北九州	福岡都心部のみに宿泊するパターンが多い
	福岡都心部－北九州－下関	福岡都心部に宿泊し、北九州・下関を日帰りで訪問するパターンが比較的多い
2	福岡都心部－太宰府－北九州	北九州でも宿泊するパターンが比較的多い
	福岡都心部－太宰府－北九州－下関	福岡都心部に宿泊し、各地域を日帰りで訪問するパターンが多い
	福岡都心部－太宰府－北九州－下関－大分県	福岡都心部と大分県に宿泊するパターンが比較的多い

第3節 北九州市・下関市内の訪問地

1. アンケートによる訪問地分析

訪問率が最も高いのは門司港地区、次いで小倉都心地区、唐戸地区が並ぶ。これらの訪問地は約5割強の旅行者が訪れている。関門地区には約3割の旅行者が訪れているが、その他の訪問地へ立ち寄った旅行者はごく僅かであった。



図表5-2(42) 北九州市・下関市内の訪問地（福岡空港調査分） ※複数回答

2. アンケートによる利用交通機関分析

北九州市・下関市内の移動に用いた交通機関は、「レンタカー」(36.5%)の割合が最も多く、次いで「JR在来線」(34.6%)、「JR新幹線」(16.7%)、「船」(8.0%)と続いている。

図表5-2(43) 北九州市・下関市内の利用交通機関 ※複数回答

交通機関	回答数	構成比
JR 新幹線	52	16.7%
JR 在来線	108	34.6%
モノレール	1	0.3%
バス	35	11.2%
タクシー・ハイヤー	6	1.9%
レンタカー	114	36.5%
自家用車、社用・公用車	1	0.3%
船	25	8.0%
その他	25	8.0%
無回答	22	7.1%

n=312

第6部 観光施策（プロモーション・受入環境整備）の方向性

第1章 アンケート結果に見る3つの国・地域の特徴

第1節 比較から見える特徴

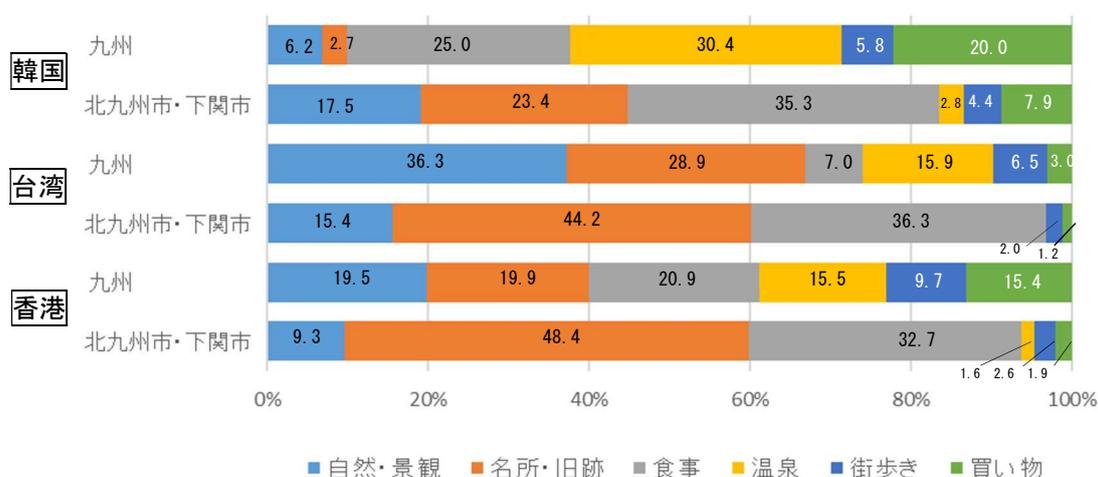
1. 訪問目的

韓国人が九州を訪問する目的は「温泉」が30.4%で最多となっている。後述する北九州市・下関市地域の高い交通利便性や多様な宿泊施設があることを活かし、別府温泉等を日帰りを楽しむなど周遊拠点としての位置づけが考えられる。

韓国人の北九州市・下関市への訪問目的のうち最も多かった回答は35.3%の「食事」で（九州においては25.0%）、自由記述欄でも資さんうどん、門司港地ビール工房といった具体的な個店名があげられている。これらの食事を楽しむ様子や店舗の情報はSNSにも多く投稿されていることから、今後も地域ならではの詳しい情報を提供していくことで、裾野の広がりが期待できる。

台湾人の北九州市・下関市への主な訪問目的においては、「名所・旧跡」の44.2%が最多（九州においては28.9%）となっている。訪問地として日清講和記念館と赤間神宮の訪問割合が多い上に自由記述欄でも評価されていることに特徴があり、歴史的なものへの関心が比較的高いと推察できる。「自然・景観」は九州訪問の主目的として最多の36.3%だが、北九州市・下関市では15.4%、「食事」は九州訪問主目的として7.0%だが、北九州市・下関市では2位の36.3%と回答割合の差が大きな項目である。

香港人にとっても「名所・旧跡」は北九州市・下関市への主目的で48.4%と最多である。同様に「食事」も台湾と同様に2位である。関心・嗜好としては台湾と香港は似ているが、「食事」についての自由記述欄では3つの国・地域に共通して満足の声が多い海鮮や寿司に加え、牛肉・焼肉の回答が韓国、台湾より多いこと、また、1.6%ながらも「温泉」を目的に北九州市・下関市を訪れていることが特徴的である。



図表6-1 (1) 訪問した主な目的

また、実際に北九州市・下関市で訪れたエリアでは、3つの国・地域ともに、門司港、小倉都心、唐戸、関門の訪問割合が他より圧倒的に多い。これは、主な訪問目的として回答数の多い上位2位の「名

所・旧跡」「食事」の両方を満たすコンテンツが前述の4エリアにあることに加え、効果的な情報発信による誘客の成果といえる。

今後は訪問が集中している4エリア以外にも、観光素材の磨き上げと情報発信を行うことで、地域としての訴求力を高め誘客につなげていく必要があるいえよう。

図表6-1(2) 北九州市・下関市の旅行で良かったもの

	韓国	台湾	香港
施設・景勝地等	<ul style="list-style-type: none"> ・藍島 ・日帰り温泉 (コロナ、あじさいの湯) ・イルミネーション ・自転車利用 ・ゲームセンター ・山田緑地 	<ul style="list-style-type: none"> ・松本清張記念館 ・九州鉄道記念館 ・日清講和記念館 ・赤間神宮 ・下関市立歴史博物館 	<ul style="list-style-type: none"> ・漫画ミュージアム ・九州鉄道記念館 ・巖流島
食事	<ul style="list-style-type: none"> ・資さんうどん ・門司港地ビール工房 ・一蘭 ・コンビニの弁当 ・牛丼 ・鍋料理 	<ul style="list-style-type: none"> ・一蘭 ・うなぎ ・餃子 ・揚げ物 	<ul style="list-style-type: none"> ・うなぎ ・牛肉・焼肉 ・ファミレス
買い物	<ul style="list-style-type: none"> ・明太子 ・魚のぬかみそ炊き ・無印良品 ・ゲーム、アニメグッズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・明太子 ・果物 ・日本酒 ・お茶道具 	<ul style="list-style-type: none"> ・明太子 ・漫画、アニメに関するもの ・腕時計
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・人が多すぎず良い ・韓国人が少なくて良い ・韓国語案内がわかりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・店員が親切 ・サービスがいいから満足 ・交通機関が便利 	<ul style="list-style-type: none"> ・人が親切、優しい ・礼儀正しい ・雰囲気がのんびり

※実際に北九州市・下関市を訪れた3つの国・地域の観光客が「良かったもの」と評価したもののうち、特徴的なものをまとめたもの。

図表6-1(3) 福岡空港における北九州市・下関市の認知度調査

	韓国	台湾	香港
認知度	50.9%	72.5%	75.8%
両方知っている	内訳 29.1%	内訳 40.6%	内訳 45.1%
北九州市のみ知っている	12.6%	29.0%	28.5%
下関市のみ知っている	9.2%	2.9%	2.2%
知っている観光施設 (回答数が多いもの 特徴的なもの)	<ul style="list-style-type: none"> ・小倉城 ・門司港レトロ 	<ul style="list-style-type: none"> ・小倉城 ・門司港レトロ ・九州鉄道記念館 ・日清講和記念館 ・赤間神宮 ・下関市立歴史博物館 ・巖流島 	<ul style="list-style-type: none"> ・小倉城 ・門司港レトロ ・九州鉄道記念館 ・赤間神宮 ・日清講和記念館 ・下関市立歴史博物館

※北九州市・下関市を訪れていない観光客を対象に福岡空港で行った調査。

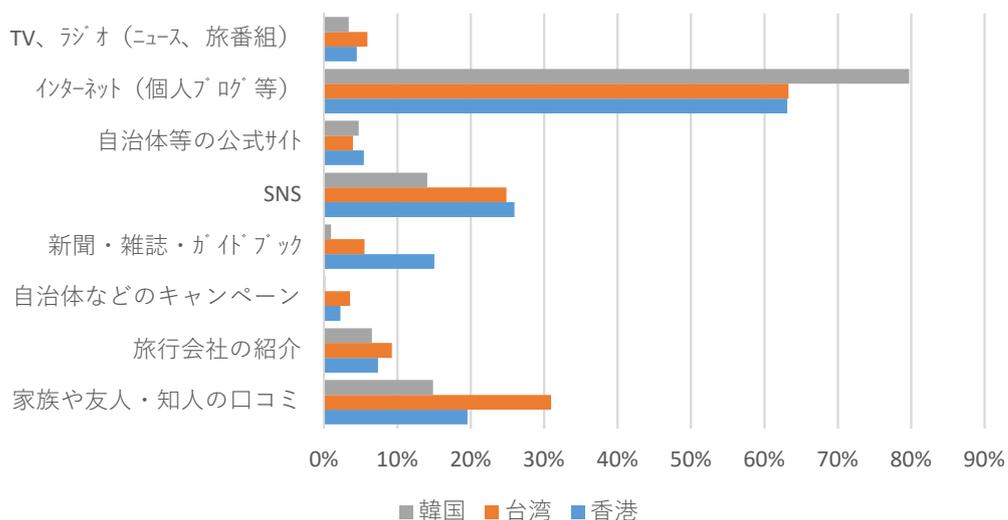
2. 観光情報の入手先

インターネットやSNSを情報源とした回答が多いが、国・地域別に比較すると以下の3点が特徴としてあげられる。

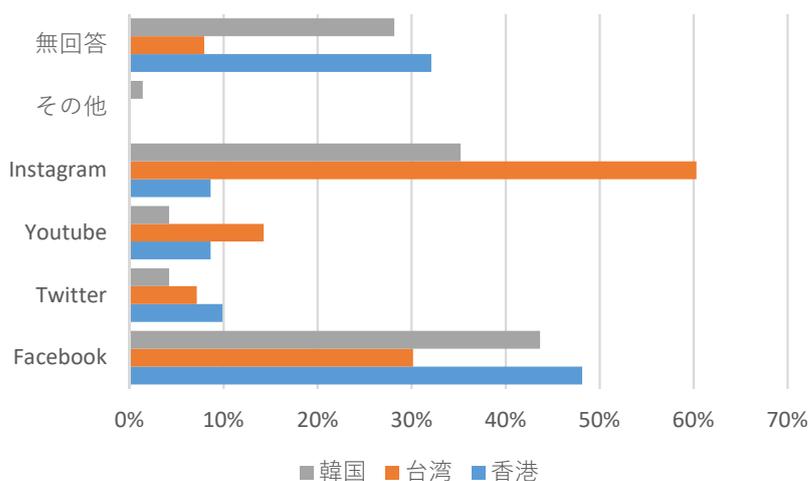
韓国はインターネット関連情報（個人ブログ、SNS、公式サイト等）の回答が9割以上で、そのうちSNSは「フェイスブック」（43.7%）と「インスタグラム」（35.2%）で約8割を占めている。インターネットの情報としては、NAVERの記載が目立った。

台湾では韓国、香港に比べて「家族や友人・知人からの口コミ」が31.0%（韓国14.9%、香港19.6%）に次いで、「旅行会社の紹介」が9.3%と高いことから、旅行会社へのアプローチが有効と思われる。SNSの内訳は「インスタグラム」が60.3%と最も多く、次点が「フェイスブック」で30.2%となっている。

香港では、韓国、台湾に比べて「新聞・雑誌やガイドブック」といった従来型の活字メディアの割合も15.1%と高く、インターネットと活字メディアそれぞれの長所を活かした情報発信が必要といえる。SNSは「フェイスブック」との回答が48.1%と最多である。



図表6-1(4) 観光情報の入手先



図表6-1(5) SNSの口コミ・投稿の具体名

3. 北九州市・下関市の宿泊理由

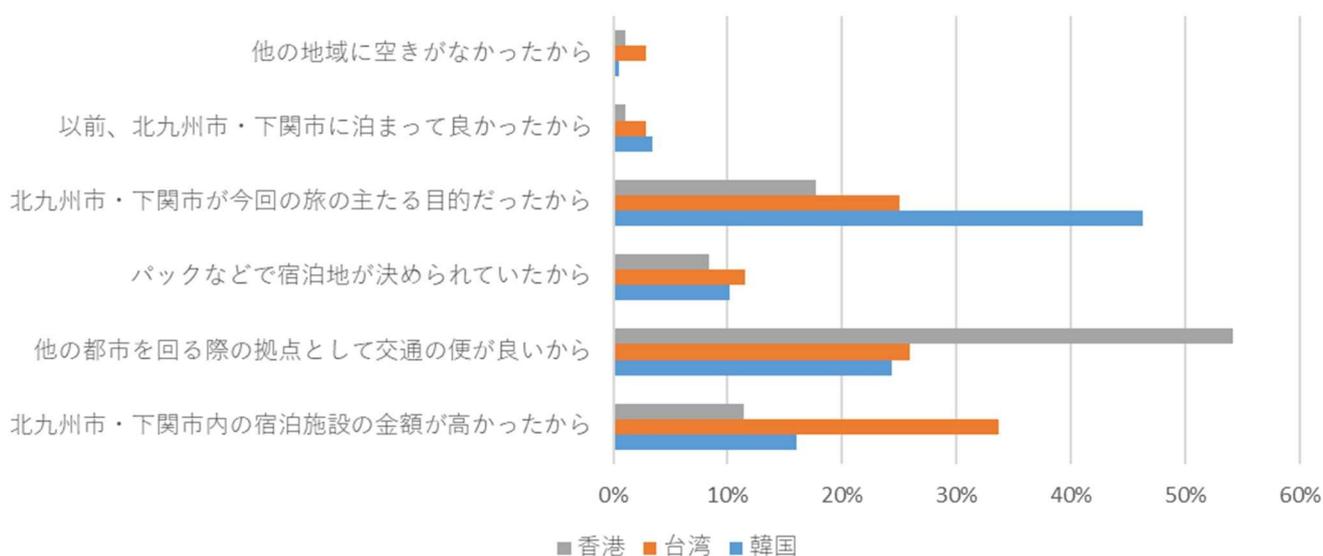
3つの国・地域からの観光客が北九州市・下関市内に宿泊した最多の理由はそれぞれ異なる。

韓国人宿泊客は46.3%が「北九州市・下関市が今回の旅の主たる目的地だから」という理由で北九州市・下関市に宿泊しており、そのうち56.8%の訪問先が「北九州市ー下関市」のみだった。

台湾人宿泊客は33.7%が「宿泊施設が安かった」ことを宿泊理由としており、宿泊費の平均においても3つの国・地域において最も安い11,467円だった。

香港人宿泊客は54.7%が「他の都市を回る際の拠点として交通の便が良いから」という理由で北九州市・下関市に宿泊している。

この交通利便性は、韓国および台湾においても大きな宿泊理由（韓国24.3%、台湾26.0%とともに次点）であることから、地域の強みといえる。



図表6-1(6) 北九州市・下関市に宿泊した理由

図表6-1(7) 1人1回あたりの旅行消費額

	韓国		台湾		香港	
	日帰り客	宿泊客	日帰り客	宿泊客	日帰り客	宿泊客
宿泊費	-	14,393	-	11,467	-	20,217
飲食費	5,681	12,165	3,562	6,313	10,770	20,008
入場料	902	2,175	556	759	607	1,558
買物・土産代	6,966	13,469	4,258	11,662	10,623	17,118
その他費用	703	3,127	1,148	1,157	308	806
合計	14,252	45,329	9,524	31,358	22,308	59,707

図表6-1(8) 九州における平均宿泊数（北九州市・下関市に訪れていない観光客）

	韓国	台湾	香港
平均宿泊数	2.3泊	5.5泊	4.5泊

図表6-1(9) 北九州市・下関市への来訪者の宿泊割合

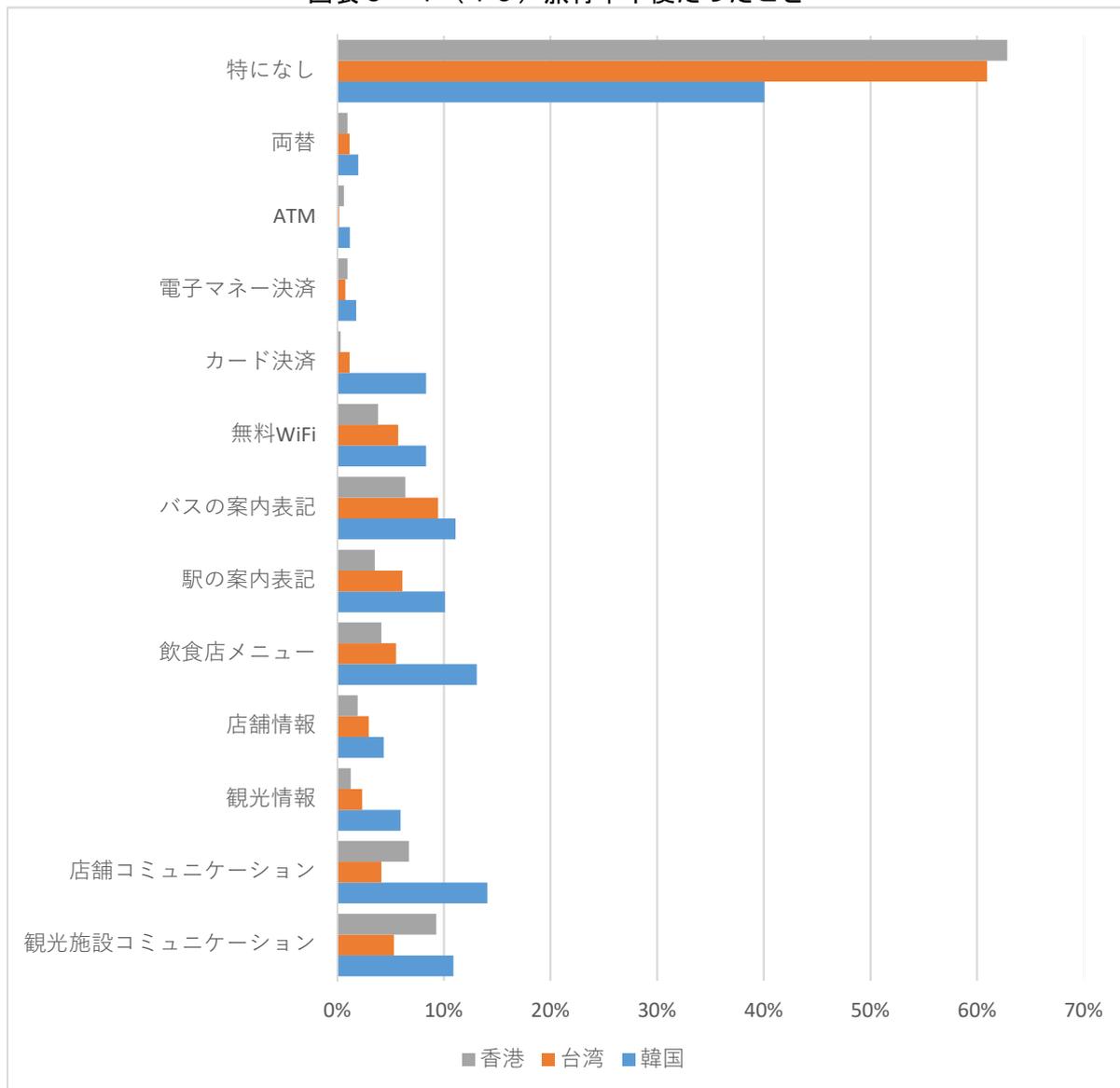
	韓国	台湾	香港
北九州市・下関市での宿泊	74.0%	20.8%	30.5%

4. 旅行中不便だったこと

旅行中不便だった点について、最多の回答は3つの国・地域とも「特になし」が最も多かった。

特に、台湾と香港は、「特になし」が60%を超えるなど、あまり不便を感じずに旅行を楽しんでいることがわかった。

図表6-1(10) 旅行中不便だったこと



第2節 3つの国・地域ごとの特徴

1. 韓国

長い歴史がある下関―釜山間の海路に加え、平成28年12月に就航した北九州―ソウル（仁川）および釜山を結ぶ空路により、韓国人にとって北九州市・下関市は訪問しやすい環境にある。北九州市・下関市を初めて訪れる観光客が多く、福岡空港の利用者に比べ北九州空港の利用者の両市への宿泊率が高くなっている。短期滞在で北九州市・下関市のみを周遊している観光客も多く、食事をメインとして観光も楽しむスタイルが好まれている。

観光情報は個人ブログ等のインターネットやSNS（調査では特にNAVERの回答が多い）から得ているという調査結果となった。

2. 台湾

北九州市・下関市を初めて訪れる観光客が多く、旅の主たる目的地になってはいないが、現在は北九州空港との直行便がなく福岡空港が主な入出国地であるにも関わらず、北九州市・下関市に来た観光客の2割が宿泊をしている。「名所・旧跡」を目的として北九州市・下関市を訪れており、特に韓国、香港との比較では歴史的なものへの関心の高さがうかがえる。北九州市・下関市での滞在期間は短いですが、全般的な旅行期間は比較的長く、拠点都市に滞在して周辺を周遊する傾向がある。

主な観光情報源はインターネット及びSNS（特にインスタグラム）だが、「旅行会社の紹介」および「家族や友人・知人からの口コミ」も情報源となっている。

3. 香港

北九州市・下関市を初めて訪れる観光客が多いが、台湾と同様に北九州空港への直行便がない現状においても、北九州市・下関市に来た観光客の3割が宿泊をしている。北九州市・下関市の滞在時間が短いながらも、全般的な旅行期間は比較的長く、拠点都市に滞在して周辺を周遊する傾向は台湾と似ているが、調査対象の中で最も旅行支出額が多い。

韓国、台湾と同様に、インターネット及びSNS（特にフェイスブック）からの観光情報源が多いが、「新聞・雑誌やガイドブック」が15.1%を占めていることは他にはない特徴である。

旅行中不便に感じたことが「特にない」という回答の割合も3つの国・地域で最も多かった。

第2章 韓国への施策

第1節 プロモーションの方向性

1. 「手軽な非日常」を様々に楽しめる街へ

食事と名所・旧跡の観光を目的に、短期間で訪問し、地域を代表する観光地と日常的な食事（ラーメン、うどん、ビール、もつ鍋、パン）や買い物（お菓子、化粧品、医薬品といった日用消費財）に満足度が高いことがわかった。店舗名や商品名を具体的に記した回答は、台湾や香港には見られなかったことから、韓国人観光客は北九州市・下関市に日常的にあるものを、「非日常」として楽しんでいると言える。

北九州市・下関市は韓国からそれぞれ空路・海路で直接結ばれていることから、他の国・地域比べて極めて近く、リピーターも多い。また、同時に関門地域のみを周遊している人も多い。北九州市・下関市の地元の「日常」に対する評価も高いので、北九州空港への定期便等を活用し、韓国人にとっての「非日常」を「手軽に」「様々に楽しめる街」としてリピーター獲得を目指すことが必要といえる。

そのため、プロモーションにおいては、定番の観光地の情報発信のみならず、地域の隠れた魅力（＝地域の日常）を発信し、リピーターの増加を図ることが必要である。具体的には、商店街やショッピングモールの買い物情報、イベント情報、地域の祭りなど、生活の中にある情報を新鮮なうちに発信していくことが効果的だといえる。短期滞在型の韓国人観光客だからこそ、多様な観光資源の情報発信することで、日帰り客が宿泊客になる可能性も大きい。

2. インターネット・SNSの活用

情報源の9割以上がインターネット及びSNSであるという結果を踏まえて、こうしたパワーブロガー等の活用により来訪のきっかけを作り、来訪者にはSNS投稿を促してさらに情報を広げることが有効であるといえる。

第2節 受入環境整備の方向性

1. 「手軽な非日常」としての価値をさらに伸ばす

韓国人にとって「手軽な非日常」として飽きずに楽しめるようには、上記のとおり生活の中にある情報を新鮮なうちに発信することが必要であり、これを街中でも行うことがより効果的である。

調査により、北九州市・下関市の「地元の日常」を、韓国人にとっては「手軽な非日常」として楽しんでいることから、受け地側がこれを最大化することが、来訪者の増加につながると考える。

具体的には、地元既に今あるものを丁寧に紹介し、来店しやすい環境づくりが必要である。例えば、韓国人に人気があるうどん、パンの店舗は地域に数多くある。いくつかの店舗（例：資さんうどん、シロヤ）は韓国人によりSNS等で紹介され、既に高い人気を誇っていることから、これら店舗の人気の理由を分析し、他の店舗も取り入れられるか検討・実施していくことで、韓国人の楽しみが多様化するとともに、地域の魅力に厚みが増すといえよう。

また、インターネットやSNS、ガイドブックには「日本旅行で買うべきアイテム」リストが掲載されており今回のアンケートにおいても、同じ物が満足度の高い買い物として記載されていた。定期的に韓国のSNS情報等を確認することで、人気アイテムを把握し地域で人気商品が買えることを店頭に表示すること等、小さなことを積み上げていくことが肝要と言える。同時に、韓国では日常的に購入できない、あるいは韓国では高額な日用消費財が他にもないか、韓国で潜在的なニーズについても検討する価値がある。

第3章 台湾への施策

第1節 プロモーションの方向性

1. 台湾と縁深いコンテンツを活かした「旅の拠点」として

調査結果より、台湾からの来訪者にとって北九州市・下関市は「九州旅行の一部」という位置づけであると推定できる。現在は北九州空港との直行便がないにも関わらず、北九州市・下関市への来訪者の2割以上が両市のいずれかまたは両方に宿泊している。宿泊施設の安さと交通利便性の高さが宿泊理由である上に、拠点都市に滞在して周遊するという行動パターンを勘案すると、地域の宿泊と交通は台湾人への訴求力が高いといえよう。

福岡空港での調査（対象：北九州市・下関市には来ていない台湾人観光客）においても両市の知名度が高いことから、平成30年10月の北九州－台北の航空定期便就航を契機に宿泊を伴う「旅の拠点」となることが、地域の強みを最大限活かすことになる。

訪問地としては、「日清講和記念館」や「赤間神宮」、「下関市立歴史博物館」の割合が調査対象中と最も多く、また評価も高い（これらの施設の認知度は、下関市に来ていない台湾人観光客においても韓国、香港より多い）ことや、関門地域と台湾の歴史的つながりから、台湾との縁や地域の歴史を感じさせるコンテンツの情報発信が有効と考えられる。

例えば、門司港発祥「バナナの叩き売り」は台湾から輸入したバナナを売っていたことや、台湾の鉄道と姉妹鉄道協定を結んだ平成筑豊鉄道等、地域のなかで台湾との縁があるものを掘り起こすとともに、ルート提案も併せて行うことで、滞在時間延長が期待できる。

2. 旅行会社と口コミも活用

他の国・地域よりレンタカー利用率が低くバスや鉄道の利用が多いこと、更に「家族や友人・知人からの口コミ」「旅行会社からの紹介」を観光情報源としている割合が多い特性を活かし、各種フリーパス（バス、鉄道）等を利用したグループ旅行のコース提案及びツアー商品造成を旅行会社に働きかけることも有効なプロモーション方法といえよう。

第2節 受け地整備の方向性

1. 「旅の拠点」の要素を強化する

北九州市・下関市での宿泊理由としては、宿泊施設の価格と交通利便性が多い。また台湾人は公共交通機関で周遊している割合が多く、不便な点として「駅の案内表記」「バスの案内表記」をあげている。北九州市・下関市には手軽な価格のお洒落なゲストハウスから、国際会議で使用されるホテル等、様々な選択肢がある。加えて、北九州－台北（台湾）の直行便就航により、現在の交通利便性が更に向上する。この2つの強みを最大限活かすには、宿泊施設内の多言語表記や、交通結節点－宿泊施設の案内の充実、また台湾人がよく訪れる場所へのわかりやすい交通案内等により、「旅の拠点」化を進めていくことが必要と思われる。

第4章 香港への施策

第1節 プロモーションの方向性

1. 「日帰り観光地」から、「昼も夜も楽しめる街へ」

調査の結果、香港からの来訪者にとって北九州市・下関市は「九州旅行の一部」という台湾に近い位置づけであるといえる。知名度は台湾同様7割以上である。北九州空港と香港の直行便がないにも関わらず北九州市・下関市に来た香港人観光客の30.5%が両市のいずれか、または両市ともに宿泊しており、理由としては交通利便性が最大である。

さらに、韓国、台湾より全般的に消費額が高いことから、満足できるものに対する支出はいとわなことが推察できる。飲食についての消費額が高く、また来訪目的でも「食事」が36.6%（九州全体では7.0%）である。

このことから、まずは高い交通利便性と飲食分野で興味を惹き付け、まだ香港人に知られていない様々な情報（北九州市・下関市内はもちろん周辺地域の情報）を発信し、「日帰り観光地」から「昼も夜も楽しめる街」を目指すことが宿泊数の増加につながると考えられる。

2. 活字メディアの活用

香港においても個人ブログ・掲示板での情報収集が6割超と最も多く、SNSの口コミがそれに続いており、インターネットでの情報収集が大勢を占めている。ただし、「新聞や雑誌・ガイドブック」での情報収集が15.1%と韓国や台湾よりも多く、一定の層が活字メディアの情報を基に旅行を考えている傾向が伺えた。台湾で多かった「特に情報源はない」という回答はなく、何らかの形で情報収集を行ったうえで旅行を計画しているものと推察される。

よって、香港人の利用が多いインターネットやSNSでタイムリーな情報を発信し、従来型の活字メディアで詳細な内容を発信する等、情報媒体の特性に応じて発信内容を使い分けることが有効といえる。

第2節 受け地整備の方向性

1. コミュニケーションも含め「昼も夜も楽しめる街」

不便な点は「特になし」と回答した割合が最も多いのが香港人だが、観光施設や店舗等スタッフとのコミュニケーションが主にあげられていた。簡単な挨拶と定型の営業フレーズのシートや、スマートフォンの翻訳アプリ等での対応策があげられる。施設や店舗間で来訪者とのコミュニケーションに不便を感じた点を共有する等により、サービスの向上につながる上に、台湾人のみならず来訪者全てへのより満足度の高いサービス提供につながる。

コミュニケーションを含めて、地域でそれぞれの立場でできることから始めて、地域全体として「昼も夜も楽しめる街」づくりに取り組んでいくことが重要である。

調査・分析

株式会社 昭文社

分析・監修

中谷 友樹 立命館大学 文学部 教授

ービッグデータの抽出方法及び分析手法の検討

桐村 喬 皇學館大学 文学部コミュニケーション学科 助教

ービッグデータの抽出方法及び分析手法の検討

ー抽出したビッグデータの加工及び作図

ーアンケート結果からみるルート分析

相原 健郎 国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系 准教授

ー観光振興の視点からのビッグデータ及びアンケート分析の手法検討

ーアンケート結果からみるルート分析

ー報告書監修